

ウワサの保護者会。

今回のテーマは「子どもの発達障害」

高山 : 今日「発達障害」という、最近特に関心の高いテーマなんですけど、発達障害のあるお子さんのお母さま方は、番組には出ませんという方が結構な数、実はいらっしゃいました。こちらは、そんな中、なんでも聞いてくださいという、3人です。



【今回のホゴシャーズ】

発達障害のある子のお母さん3人。

ネコ (母) : 長男・中1

サボテン (母) : 長女・中1/長男・小2/次男・年中

フラミンゴ (母) : 長男・高2/長女・中2

そして、その友人。

デイジー (母)

あおむし (母)

さらに、発達障害のことを知りたいというお母さんたち。

すずらん (母) : 長女・中1

チェリー (母) : 長女・中3/次女・小1

れんげ (母) : 長男・高3/長女・中3

8人で、親同士、どうすればいい関係を築けるかを話し合う！

高山 : すずらんさんは、発達障害のことはご存じですか？

すずらん : 私は、すいません。全くわからなくて…。

なんかどういふうに、接したらいいとか、教えていただければと思っています。

チェリー : 子どもたちがそういったお子さんに出会ったときに、どのように私が教えたらいいいのか、知りたいなと思います。

尾木 : みんな関心を持っているんだけど、両者ともに遠慮しているみたいなことあるでしょ？
でもまず、きたんのない感想とかね、意見とか不満だとか、いいのよ、ガンガン言って。

発達障害には、大きくわけて3つの現れ方がある。

注意力や集中力などに課題のある **ADHD**



特定の学習に困難を抱える **学習障害**



そして、対人関係の不器用さや、ものごとへの強いこだわりがある **自閉スペクトラム症**





サボテン：うちの子は多動なので席に座ってられないし、気に入らないことがあると、（教室に）かかっている給食着を全部まとめて窓から外に投げることも…。

高山：そしてフラミンゴさん。

フラミンゴ：小さいときは「そこにこだわる？」っていうようなことがいっぱいありました。

うちの子は犬が嫌いなんですけど、学校へ行くときに犬が出てきたというので、そのまま家に帰ってきてしまうとか。何か理由があるんですけど、それをうまく説明ができないみたいで。

すずらん：本当に基本的な質問なんですけど、発達障害って病気なのですか？それとも何かこう、個性っていうか…。

フラミンゴ：私は病気とは捉えていなくて、個性というか…。どっちでもいいんですよ。病気と捉えたい人がいればそう捉えてもらって。それで納得できるのであれば「その子は病気なんだ。しょうがないね」って思ってもらえばいいし（個性と捉えて納得できるならそれでよい）。その子のことを納得できる見方をすればいいのかなと。

すずらん：うーん。

高山：まずは、サボテンさんのご家庭で、ふだんどんな生活を送っていらっしゃるのかというのを、ご覧いただきたいと思います。

サボテン：はい（笑）

友だちとドッジボールするのが大好き。

サボテンさんのお宅のよっちゃんは、小学5年生。

友だち思いで運動神経抜群のよっちゃんは、近所の子どものなかでリーダー的存在だ。

よっちゃんの行動が、他の子と少し違うことにお母さんのサボテンさんが気づいたのは、幼稚園のころ。

- ・登ってはいけない高いところに登って、先生やお母さんを困らせた。
- ・少し目を離れたすきに、道路に急に飛び出して、車にひかれそうになった。
- ・買い物するとき、知らないおじさんのお尻をいきなり叩いてしまった。

心配になったサボテンさんは、医師のもとを訪ねた。

その結果、よっちゃんにはADHD、学習障害、それに自閉傾向という発達障害があると診断された。

サボテン：「謎が解けた！」という。なんで？っていう変な行動をしていたから「ああ、そうか」って思った部分と「え、うそでしょ」って思った部分と…。

よっちゃんは現在、普通学級に通いながら、
月2回、苦手な部分を補うための特別支援教室にも通っている。
以前に比べ、落ち着いて学校生活を送れているという。

診断を受けてから6年、サボテンさんは、よっちゃんと向き合うなかで、見えてきた特性があるという。
よっちゃんには、自分が決めたルールや約束ごとへの強い「こだわり」があるのだ。



特にこだわるのが、大好きな友だちとの約束。

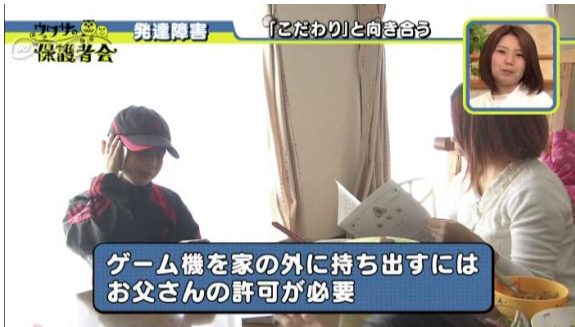
例えば、朝、学校に行くとき、友だちとの待ち合わせにたった2分遅れただけで、「もう行かない！」と、そのまま学校を休んでしまったことも。

発達障害のある子どもは、自分が決めたことが思い通りにならなかったとき、感情をおさえられなくなることがある。

この日よっちゃんは、仲のいい友だちの家に遊びに行く約束をしていた。

よっちゃん：DS持って行こう。

今日は、携帯ゲーム機を持って行くことに決めているようだ。
でも、よっちゃんの家では、ゲーム機を家の外に持ち出すには、お父さんの許可が必要。



よっちゃん (電話口のお父さんに) : もしもし、パパ?

さっそく電話をしたよっちゃんだったが、元気に外で遊びなさいと言われてしまった。
ゲーム機を持って行くことができない。

よっちゃん (サボテンさんに) : もういい、やらない。行かないから。

サボテン : 違うよ、みんながここに来ればいいじゃん。家の中ではやってもいいって言っていたから。

よっちゃん : 行かない。行かないよ!

サボテン : 行かないの?

よっちゃん : つぶれたよ。どっかの誰かさんのせいで!

決めたことができずに、感情がおさえられない、よっちゃん。

サボテン : 友だち待ってるんじゃない?

よっちゃん : 待ってるに決まってるじゃん!

サボテン : じゃあ行こうよ。

よっちゃん : お前らのせいでつぶれたんだよ。お前が行けよ。ウザいんだよ! めざわりなんだよ!

こうなると気持ちをすぐに切り替えることができない。

サボテン (取材スタッフに) : ここからが長いんですけど…。

これがただの「わがまま」ではないこともわかっているサボテンさん。
こんなときは気分が落ち着くのを待つしかない。

♪ピンポン (インターホンが鳴る)

サボテン : もしかして、来てくれたのかな?

よっちゃん：違うでしょ。

サボテン (インターホンに答えて)：はい。います、います！待っててー。

なんと、心配した友だちが家まで来てくれたのだ。

サボテン：よかったね。日ごろの行いがいいんだよ。怒ってるの？よっちゃん。

よっちゃん (サボテンさんに)：さわらないで！

よっちゃん (友だちに)：入っていいよー！ごめん、行けなくてー！

この日は大好きな友だちに救われたが、よっちゃんの特性に悪戦苦闘する毎日。

サボテンさんは、よっちゃんの成長をじっくり見守っている。

高山：元気な、よっちゃんですが。

チェリーさんは今、よっちゃんのことをどんなふうに見られましたか？

チェリー：あの、正直普通の男の子、元気な男の子に見えました。全くそういった発達障害のお子さんっていうようには思わなかったですね。

サボテン：割と、暴力的になるんですね。もう、すごく兄弟にあたったり、おうちの物を壊したりして。もう、家がかかなりボロボロなんですけど (苦笑) そこがやっぱり「定型発達」の子とちょっと違うのかなって思います。

尾木：発達障害の場合、ぱっと見たところではそういう特徴がわからないから、余計引いちゃうし、どう対応していいのかわからなくなっちゃうんだと思うのね。

すずらん：だから、そこで何となく距離があいてしまうというか…。なんかできることってあるのかなって思っていたんですけど、なんとなく見て見ぬふりっていうか…。

れんげ：何かしてあげたいけど、実際何をしてあげればいいのかなって。

フラミンゴ：すごくありがたい。

チェリー：その、あえて手を差し伸べるのが、迷惑と捉えられるんじゃないか、間違ったことをしてしまつて、余計なお世話になるんじゃないかっていう不安がある。

フラミンゴ：その気持ちはすごくありがたくて。ただ、その子にとって必要なことであればすごく嬉しいけど、その子にとってちょっと迷惑だったりすると…。

チェリー：やっぱり、そういうこともあるっていうことですよ。

フラミンゴ：そうですね。本当にいろんな子がいるので、発達障害ってひと言で言っても「その子にとってどうか」っていうところにまずは目を向けるというか、その子がどうなのかってことですかね。

高山 : さあ、そしてダイジーさん。ダイジーさんは、今はサボテンさんのよき理解者ですけども、なかなか最初は大変だったって聞いています。

ダイジー : 怒っちゃうと、歯止め利かなくなっちゃったりしました。ねえ。

サボテン : うん。すごいよね。

ダイジー : (よっちゃんに)「クソババア」って言われた記憶があるのね、私 (笑)

高山 : ご近所の皆さんにも?

ダイジー : はい。「え?今なんて言った? (怒)」って… (笑)

高山 : でもそこから、今のいい理解者になるまでに何があったのかということで、ちょっとご覧いただきたいと思います。

サボテンさんは、あるとき、近所の人から、よっちゃんの外での行動を耳にした。

サボテン : おうちの中に勝手に入るとか、お庭の飾りや、おうち中のものを、とにかく壊してしまう。怒って投げちゃうんですね。

よっちゃんが、近所で迷惑をかけていたことを知りショックを受けたサボテンさんは、ある行動に出た。

サボテン : よっちゃんを家の外に出すと、また何かするという恐怖とか、迷惑をかけちゃうからとか思って。外に出さなければ迷惑かけないって思っちゃって、家中に鍵をかけて、とにかくよっちゃんが外に出て行かないようにしました。

学校から帰ってきたよっちゃんと家に閉じこもってしまったサボテンさん。それは2週間続いた。

サボテン : 「なんで出してくれないんだ!」ってなるし、もう窓とかガチャガチャやるのを一生懸命抑えて「ダメなの。お願い。出ないでお願い。」って言って…。いつまでこれが続くのかという不安で参ってくるんですね。

見かけなくなったサボテンさんを、陰ながら心配していた人がいた。

よっちゃんを小さい頃から知っていて、何でも気兼ねなく話せる近所のお母さんたちだ。

友人 : 「どうしたのかな」っていうのはあったんですね。ちょっと様子見ようかなって…。会ったとき、ちょっとずつ会話していこうかなって感じですかね。

よっちゃんが学校に行っている間、サボテンさんは、そうしたお母さんたちに、近所に迷惑を掛けていることの心苦しさを少しずつ打ち明けていった。

サボテン：みんな「こうしたほうがいい、ああしたほうがいい」ってことを言うんじゃないんですよ。「うんうん。うんうん。」と聞いてくれるんですよ。ただただ、聞いてくれていたのかな。なんかそんな気がしますね。

サボテンさんは、迷惑をかけていた周囲の人たちに、よっちゃんの発達障害のことを説明して回った。その結果、近所全体で見守っていこうという雰囲気が生まれ、少しずつ理解も深まってきているようだ。

チェリー：うーん。話して周りが受け止めてくれて、すごくよかったなって思いますね。

ネコ：近所の皆さんもよっちゃんのことを、ちゃんと見ているから。悪い部分だけじゃなくて、よっちゃんの素晴らしいところもふだん見ているから、そこでうんうんって聞いてくれるんだよね。

高山：ちなみに、ご近所の皆さんにはサボテンさんの方から何かアクションをされたんですか？

サボテン：ピンポンとベルを押して「よっちゃんが今までこういうことをやっていたのは、こういう（発達障害があつての）ことでした。何回言ってもわからなくてごめんなさい。」っていう話をして「でも、少しずつ教えていきます。一生懸命教えます。」っていう話をしました。

もう、近所の方全員、そこの区画の方には全部に言ったっていう感じです。

高山：デイジーさん。「手を差し伸べたいな」っていう思いっていうのは、ご近所の皆さんは、常々以前から思っていたらっしゃったんですか？

デイジー：やっぱり「どうやって接したらいいのかな」っていうようなことは話していたんですけど、「今のままでいいんじゃない」っていう話になって…。

高山：変わらないのがいいんじゃないかと？

デイジー：変わらないで、今まで通り。悪いことをやったらやっただで怒るし。

尾木：やっぱり、僕思うんですけどね。「人に迷惑かけないような子になりなさい」っていうのはあり得ない。迷惑をかけたとかけられたりする、“お互いさま精神”なんですよ。お互いさまなんだから、ともに許し合ってね、成長していこうっていうのならわかるけど、迷惑かけない人になりなさいなんて、そんなの絶対ない。もうあれは間違いよ、もう（笑）

ここで、番組に寄せられた声をご紹介します。

発達障害のある子の親との関係に悩む、保護者の皆さんから。

友だちの子どもが落ち着きなく、順番待ちができず、すぐトラブルになります。

その子の親は「これは個性の範囲内」と取り合ってくれません。正直周りが気を遣うし、私の子どもも、たたかれて嫌な思いばかりしています。

高山 : 個性の範囲内というように片付けられることに、ちょっと違和感を覚えるという反応なんですけど。

すずらん : お友だちの話で、そういった暴力をふるう子がいて、親御さんがちゃんと謝ってくれたら、別に言うつもりもないんですが「しょうがないじゃないうちの子は」みたいな感じで言われちゃうと、ちょっと「こっちは、暴力振るわれているんですけど」って思ってしまうという話は聞いたことがあります。

高山 : なるほど。

ネコ : 私は個人的に、周りに迷惑かけているようなことを「個性の範囲内」で片付けちゃだめだと思っているんですね。

サボテン : 暴力はだめですよ。暴力は個性で片付けてはいけなかなと、私は思うので。

すずらん : 抑えられない衝動っていうのはあるんですよね？

サボテン・ネコ・フラミンゴ : あるけど、あるんですけど…。

ネコ : 本人もわかっているんですよ。言っちゃいけないとか、やっちゃいけないとか。わかっているけれど、出ちゃうんですよ。「ごめんなさい。ごめんなさい。」って本人も言いながら、暴力をふるってくるんです。それが、やっぱり私も見ていて辛かった。

当時は、しばらく様子を見ていたんですけど、中学校に入ってまだやっぱり続いていたので、ちょっとお薬を飲んでみようかなというので飲み始めたら、穏やかになってきて。

すずらん : なので、私は病気と個性の違いってそこだと思うんですよね。病気っていうのは、自分では押さえられないことだと思っていて、個性っていうのは、ある程度理解すれば押さえられることって思うんです。

なので、最初の質問になるんですけど「病気だったらしょうがない」って周りも受け止めるしかないのでは？

フラミンゴ : さっきの例（番組に寄せられた声）で言うと、列に割り込んでしまったのを「個性の範囲だから」って言われたとして、でも、ルールを守れないのはその親御さんも困ると思うんですよね。その集団にいたかったらそのルールは守ったほうがいいってことを教えたほうがいい。

すずらん : それはできるんですよね？

ネコ : 変わってはいくので。

すずらん : じゃあ、治るとか治らないとか、そういうことじゃなくって、なんていうのかな…。

フラミンゴ : うーん、治る…、変わっていくと思います。

ネコ : まあ、言い続ければ。

フラミンゴ : うん。言い続ける。

れんげ : 時間がかかるってことですか？

ネコ : すぐには治らないかもしれないけど、その列に割り込みをして、暴力ふるってというようなことをしないようになる訓練を重ねる。子どもにもちゃんと説明をして、ここで暴力をふるったらみんなと一緒に並べないよっていうのを教えて、暴力をふるわないように訓練をするしかないんですよ。暴力をふるわなければ、みんなと楽しくそこにいられるんだっていう経験を積んでいくしかない。

チェリー：私は「うちの子はそういう子です」ってことを最初に言われたほうが、突破口を見いだせるんじゃないかと思うんですね。皆で話し合うとか。

フラミンゴ：うちは、小学1年生の入学した当初に、皆さんに発表したんですね。

あおむし：保護者会だったかな？

高山：まさに保護者会で。

フラミンゴ：でも、たぶん今の私だったら打ち明けないと思うんです。

一同：え？

フラミンゴ：当時はすごく、気持ちがいっぱいいっぱいだったから、わかってほしかったんです。

ラッキーにもいい人ばかりだったなと私は思っているけど、やっぱり「発達障害」って聞いたことで、その人の想像で、なんか、この子はこんな子なんだっていうイメージができて…。できあがってしまって、発達障害って言ってしまったことによって「どう関わってあげたらいいかわからなくてごめんね」みたいなことを最後に言われたこともあった。まだ「発達障害」っていう言葉が定着もしてないし、いろんなタイプがあるので、それを一言で言うのは、本当に危険な感じでね。

れんげ：いろんな方がいらっしゃいますもんね。

フラミンゴ：受け取り方もそれぞれだし。

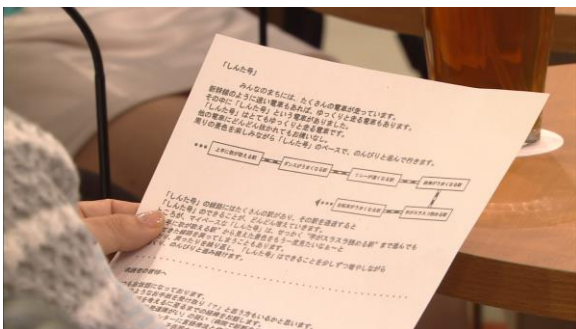
ネコ：やっぱり、タイミングが重要なのかなって感じがするんですね。

まずは子どもの状態を見てもらって、親御さん同士もある程度わかってきてからのカミングアウトならいいかなと思うんですけど、最初から言うのと「発達障害」って言葉だけが、なんか先走ってしまう。

「あの子は発達障害だからあんなことするのね」みたいな感じで、片づけられてしまうので。

高山：ネコさんは、かつてお子さんのことで、ご自身で工夫をして発信をされた経験があるんですね。

ネコさんは、お子さんが幼稚園の頃、子どもの発達障害について知ってもらうため、クラスの親全員に、自作のプリントを配ったという。



ネコ：息子は「しんた」っていうんですけど、私が幼稚園にお迎えに行くと、子どもたちがやってきて「しんた君は何でしゃべれないの」「しんた君は何でリレーできないの」「病気のの」って、私に質問をしてくるようになったんですね。

じゃあ、ちょっと物語を作ろうと思って作ったのがこのお話なんですけれど。

「しんた号」

みんなのまちにはたくさんの電車が走っています。

新幹線のように速い電車もあればゆっくりと走る電車もあります。

「しんた号」はとてもゆっくりと走る電車です。

「しんた号」の線路にはたくさんの駅があり その駅を通過すると

「しんた号」のできることがどんどん増えていきます。

ところがマイペースな「しんた号」はせっかく“字がすらすら読める駅”まで進んでも
通ってきた線路を戻ってしまうこともあります。

進んだり戻ったりを繰り返して「しんた号」はできることを少しずつ増やしなが
ら ゆっくり のんびりと進み続けます。

尾木 : 皆さん、どう思われます？

れんげ : ちょっと言葉にならなくて…。お母さん、すごく子どものことを考えているんだなって思った
ので…。

すずらん : こういようにしたら、自分はこれでいいのかなってちょっと楽になる子がいるんじゃない
かなって思いますね。

チェリー : 大人も楽になるのかなと。

すずらん : うちの子も遅くても別に大丈夫なんだっていうように、これを読んで、すごく思いました。

あおむし : これで周りのお子さんの反応や、保護者から何か反応はありましたか？

ネコ : 変わりました。まず、子どもたちもそれですんなりうちの息子がマイペースなんだっていうの
が受け入れられたみたいで。うちの子に、電車のメンコなどのプレゼントをしてくれるよう
になったんですね。それまで、全く関わりのないお子さんだったのに「これきっと、しんた君が
喜ぶよ」って。お母さん方も「あのお話よかったよ」って言ってくださったり「子どもに何回
も読んでと言われたの」って言ってくれたり。

あとは、お母さん方の目が温かくなったって、私は感じたんですね。変わってないのかもしれ
ないけれど「この間しんた君、こんなことができるようになったよ」とか、私以外の目が増え
たような感じはしましたね。

すずらん : 子どもに「発達障害って何」って聞かれたら、正直答えられなかったんですけど、でもこ
の「しんた号」の、このことなんだよっていうのを言ったら、すごく子どももわかりやすいし、
私も説明ができると思います。

チェリー : 誰しも得意なこと、苦手なことがあるように、ちょっと苦手なことが大きいだけで、一緒。
一緒なんですよ。それが、わかりました。

尾木 : 今日このホゴシャーズの皆さんのやりとりがね、少しでも伝わって「あーそうか。こういうものの見方でいいんだ」っていうようにね、肩の荷を楽にしてもらえて、それから皆さんがいい目でちゃんと理解して交流していただければ、すごく嬉しいなと思いますよね。

ウワサの保護者会では皆さんの体験やご意見をお待ちしています。

番組ホームページまで、是非お寄せください!

いっしょに考えてみませんか?

(終)